

七日参り

竹中尚文

人と出会う中で私が坊さんだとわかると、その人の悲しみを聞くことがよくあります。その悲しみとは、大切な方が亡くなられたことです。時に、悲しみの中にのみ生きる人がいます。それは残念なことです。大切な人が亡くなったのだからこそ、それまでになかった新たな人生にも遇ってほしいと思います。仏様に出会うことによって、新たな一歩のきっかけになるかもしれません。私が参る七日参りは、正信偈をあげて御法話をします。このお参りで、人が仏様に出会うご縁になればと思います。大切な人の死が、縁者の悲しみだけで終わらせない生き方になればと思います。また、悲しみを乗り越えない生き方であればと思います。

二 七 日

1. 本眼力にあひぬれば

浄土真宗のお葬式では、「本願力にあひぬれば、むなしくすぐる人ぞなき」という和讃が読誦されます。葬儀の終盤になってきた頃に、この和讃があげられるのです。

私は長い間、疑問に思っていました。「本願力にあひぬれば」というのは、阿弥陀様の力に出会ったならということでしょう。阿弥陀様の力に出会って、有意義な明日を迎えると言われてもなあ、と思っていました。

た。

私は、かつて火葬場の建物の前で、老人と若い娘が抱き合って泣いているのを見ました。老人にとっては、息子を亡くし、娘にとっては父親を亡くしたのです。二人とも悲しみのあまり、立ってられないように泣いていました。彼らにとっては、本当に大地が崩れるような感じだったと思います。大切な方を亡くしたとき、何物もすべて崩れるように感じるのでしょうか。

大切な人を亡くした人々に、明日から有意義な日々ですよ、と言ったところで実感できるだろうかと思っていました。

2. 導師として

あるお葬式に遇って、私の考えは変わりました。それ以来、葬儀屋さんには、必ず棺掛けを用意してもらいます。それは独特の編み方をした紐の付いた錦織の布です。この布でお棺を被うのです。私には譲れないところなんです。かつて、葬儀屋さんから抗議を受けました。「そんなものを掛けると、お棺の彫刻が見えなくなってしまいます。」お棺の彫刻は不要なものです。その葬儀屋さんは最近、彫刻入りのお棺を勧めなくなったと思ったら、「上・中・下」の棺掛けを作って、どれがいいかと尋ねるそうです。

葬儀屋さんは棺掛けと称していますが、本来は七條袈裟なのです。浄土真宗が使う七條袈裟は大きな、立派な錦織の袈裟です。それでお棺を被うように掛けるのです。同じように七條袈裟をつけた導師が、仏様の最も近い所に座ります。

浄土真宗のお葬式では、亡くなられた方が本当の導師なのです。即得成仏を説きますから、亡くなられた方はすぐに仏様になられるのです。仏となって、お葬式の導師を勤められるというのです。私は葬儀司会者に「導師の入場です」と紹介されて登場するのですが、実は導師ではないのです。私は導師代理なのです。

お葬式での私の声は大きいと言われます。私は精一杯の声を出すことにしています。それは、私が仏様の代理を勤めさせていただくのですから、力一杯の声を出すことにしています。

3. 娘の死

お葬式は、いつも突然です。枕経の依頼の電話をもらって、明け方の頃に車を走らせました。当時は、カーナビのない時代でしたので、電話で教わった住所のあたりに到着しました。夜明け前に家中の電灯が灯っているお宅の前に立ちました。

父親が、私に葬儀の依頼をするのは自分の葬儀の時だと思っていたとおっしゃいました。まさか娘の葬儀を頼むとは思わなかったと涙ながらに話されました。通夜と葬儀は、

多くの会葬者でした。そのお嬢さんは、会社で明るく笑いをとる人気者だったそうです。

少し話がそれますが、このご両親には、いわゆる家族葬という選択肢はなかったようです。お嬢さんの生き方を思っただけのお葬式だったとおもいます。子供のお葬式では、ひっそりとしたお葬式を選択されることも少なくないようです。誰にも顔を会わせたくないのだし、誰とも会話をすることもできません。子供のお葬式で、親の心は強靱ではありません。子供を亡くした親の心は、ティッシュの折り紙のようなものです。なんとか形を保っていても、ちょっとしたことで、グシャリとつぶれてしまいます。

話を戻しましょう。私はこのお嬢さんの病名をご両親から聞いたのですが、初めて聞く病名ですぐに忘れてしまいました。ただ、眼球の奥にある視神経にできる癌のような病気だと思いました。

治療が進む中で、医者は両眼の摘出を提案されたそうです。ご両親は、悩みました。いくら治療だからと言っても、すぐに「はい、目を取ってください」といえるわけがないとお

っしゃっていました。治療は、娘さんの「お母ちゃん、目を取ってもええか？」の言葉で決まりました。

ご両親は娘があんなに頑張っているのだから、自分たちも頑張ろう、娘の前では泣くまいと、決めて病室に通われたそうです。ある日、病室で父親はこらえきれずに涙を流していたそうです。無言で涙が流れていたそうです。その姿に、娘さんが「お父ちゃん！泣いとったら、アカン。泣いとらんで、しっかり仕事行きや。頑張って、お母ちゃんをラクにしたってや。お父ちゃん、働け！」と言われたそうです。

両目を摘出した娘さんに、お父さんの涙は見えていたのです。人間は目で見えるものだけが真実ではありません。心で見る真実もあります。

そして、娘さんは亡くなっていきました。ご両親は、頑張りがんばって、娘のお葬式だけは出しました。しかし、お葬式の後には、何の気力も失せてしまいました。父親は自営業です。このまま仕事をたたんでしまいたいと思ったそうです。

「あの娘には、何もかも見えてたんや、と思います。こないにガタガタになってしもた私らの姿も」

「あの『お父ちゃん、はたらけー』の言葉が私らを立ち上がらせてくれたのです」と。

お父さんは、今も年をとったと言いながら、頑張っている。

4. 仏の説法

先にも申しましたが、浄土真宗では、亡くなられた方がすぐに仏と成って、説法をされるのです。だから、お葬式では近親者が最前列に座るのです。そして、七日参りでも法事でも最前列に座るのです。仏様の説法を、一番近い所で聞かせてもらうのです。

身近な人の死は、とてつもなく大

きな出来事です。それは人の生死を語る機会なのです。この真理に出会う機会こそがお葬式なのです。この機会に出会うことが、「本願力にあひぬれば」と言うことです。

一方、先に往かれた方は、遺してきた人にしっかり生きて欲しいと願って説法をされるのでしょう。自分が生きられなかった明日をしっかり生きて欲しいと。その思いを受け止めるところに、死の向こう側とこちら側がつながるのだと思います。生死を超越したつながりを知った生き方は、決して虚しいものではないのです。